幸手小学校の歴史①～「徳智修開」と秋月種樹～

幸手小学校の職員玄関を入ると、正面上に「徳智修開」の看板が目に飛び込んできます。この「徳」の文字は旧字体で「すなおな心」をあらわす文字です。

幸手小学校の「新校舎落成式」（明治11年10月）の写真は、擬洋風建築で新築された校舎の正面玄関のうえ、二階のバルコニーの上に「徳智修開」の文字を確認することができます。手前の門には「幸手学校」の看板が掲げられています。

この「徳智修開」の文字は、高鍋藩出身の秋月種樹（あきつきたねたつ）によって揮毫されたものとして伝えられています。

秋月は、高鍋藩主の三男に生まれ、幼少から安井息軒らに師事して儒学を学び、江戸末期の将軍・徳川家茂や明治天皇の侍読（現代の家庭教師）として仕えた儒学者です。明治11年9月、秋月は、かねてから関心のあった水戸藩の天狗党の乱の跡が残る大平山（現在の栃木県）に向かう途中、幸手宿に立ち寄った際、擬洋風建築の校舎を見て揮毫されたとされています。

「徳智修開」の 4 文字をどのように解読するかは意見の分かれるところで、従来は、「徳（心）をしっかり修め、身につけた知識や技能を自分のものだけにすることなく、広く社会の為に役に立て、世の中に尽くす人になりなさい」と解釈されてきました。

令和になり、改めて調査がされた際には、次のように考えられました。

すなわち、「徳智修開」の4文字は「学制」（明治5年8月）の「前文」である「被仰出書」（「学制」に関する太政官布告）に繰り返し使われるフレーズ、「その身を修め、智を開き」から採用されたものではないかという解釈です。

「徳（心）を身に付け、学問を深く学べ」

こう考えると、「学問は立身出世のもと」と考える「学制」の趣旨と一致します。

「学制」は、儒学ではなく洋学の学問観や教育観に基づいて編成されましたが、秋月は幸手学校の擬洋風建築を目の前にして、「学制」の意義を説いたのではないか、と考えてみてはいかがでしょうか。

「学制」は、明治12年9月に廃止されました。明治維新の諸改革の中、学校教育も寺子屋から学校への過渡期にあって混乱を極めた時代に、明治天皇は、明治11年9月に北陸巡幸で目の当たりにした小学校教育の乱れを憂い、元田永孚（もとだながざね）に命じて徳育の強化を図りました。儒学の復権です。こうして、洋学派の「学制」は終焉を迎えたのです。奇しくも、秋月が「徳智修開」と揮毫した1年後のことでした。

「学制」終焉の直前に揮毫された「徳智修開」の志は、「素直な心でしっかり学べ」という現代的な意義となり、今日も校是として幸手小学校に受け継がれています。